

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅診療における STAS (Support Team Assessment Schedule) の活用
演者名	小串哲生、馬場顕介、平田雅文、佐藤忠直、中野雅規
所属	元町ひまわりクリニック

目的

STAS (Support Team Assessment Schedule) は緩和ケアにおける 9 項目からなる評価尺度である。医療スタッフによる客観的評価のため、患者本人には負担をかけない方法である。主に病院において使用されている評価方法であるが、在宅療養中のがん患者においてもケア内容や家族の不安について客観的な評価が期待できる。今回在宅診療における STAS の活用について検討してみた。

実践内容

在宅療養中の 82 歳男性大腸がん患者に STAS を用いることによってケアの評価および家族の理解や不安について評価を行い、在宅診療における STAS の活用について検討してみた。

実践効果

訪問診療開始時、既に悪液質が進行していたが、自宅には段差が多く転倒リスクが予想された。夜間不眠およびせん妄も主介護者である次女の不安要因であった。疼痛については腰部の突出痛を認めた。様々な問題に対し STAS にて評価を行い、共通尺度のもとに多職種カンファレンスを行った。その結果、本人の身体的な苦痛および家族の不安に対し、医学面および介護面から複合的なアプローチを行うことができ、ケアの向上に有用であった。

考察

在宅医療においては、病状の評価や家族支援についてスタッフの主観的な評価が反映される傾向がある。自宅で最期を迎えたいという患者や家族の希望があっても、医療者側と患者・家族との間に十分な信頼関係がなければ実現困難である。STAS では、患者のみならず家族の病状認識や家族の不安を的確にアセスメントできるため、家族の不安軽減や良好な病状理解に役立ち、医療者-家族間の信頼関係を構築することが可能である。STAS は在宅ホスピスケア実施における評価ツールとして有用であり、スタッフ連携時の情報共有ツールとして活用が期待される。